

論 説

アメリカのサバービア再考 ニューヨーク、フィラデルフィアの郊外の事例から

中 野 雅 博

目 次

はじめに

1章 問題の所在

2章 ニューヨーク州のレビットタウンの事例

3章 ペンシルベニア州レビットタウンの事例

4章 ペンシルベニア州マーブルの事例

おわりに

はじめに

シカゴやロサンゼルスなどの大都市を訪れた旅行者は、飛行機から眼下にひろがる広大な都市地域に驚嘆し、都心のビジネス街に林立する摩天楼の巨大さと重量感に圧倒される。しかし、今日アメリカ人の多くはいわゆる大都市域の中心市（Central City）、例えばニューヨーク市とかロサンゼルス市に住んでいるのではなく、それらの都市の郊外により多く住んでいる。ところで、アメリカの郊外は日本のそれとは違って、中心市（都心）から高速道路をノンストップで1時間以上走ったあたりでも「郊外」になるほどの広がりを持った地域であり、かつその郊外がそれぞれ独立した自治体であるので、中心市との依存関係が日本のそれとはかなり異なっている点が重要である。

1990年にアメリカは史上はじめて、郊外人口が中心市と農村の人口の合計つまり全体の過半数を上まわった¹⁾。

ところで郊外という地域は、一般的には車の所有・利用が前提となって建設された住宅専用地域なので、旅行者や短期滞在の外国人にとっては、郊外生活の快適さを実感したりその変化や問題点を見つけ出すことは中々困難である。

しかし、この郊外生活（Suburbia サバービア）、つまり広々とした美しい郊外に家族のための一戸建て住宅を持つことは、多くのアメリカ人にとって夢（アメリカン・ドリーム）であり、それは19世紀の移民の時代から今も変わっていない。

アメリカのサバービアが日本人にとって無視できないのは、第二次大戦後におけるわが国の戦災復興と経済発展の中で紹介されたアメリカ的生活様式が日本人にとっては見果てぬ夢（羨望）であったと同時に、一種のモデル（努力目標）となり、我々に強烈な影響を与えたからである²⁾。それはアメリカの大都市郊外の2階建て住宅（コロニアル・スタイルかカリフォルニア・バンガロー様式）で、建物を道路からさげ、母屋の横には母屋にマッチしたスタイルの車庫がある。道路と母屋との間は広々とした芝生になっており道路にそって大きな街路樹がある。我々を一番驚かせたのは、日本の大きな家と比較してその家にフェンスや門がないということであった。また、母屋の裏にはヤードと呼ばれる裏庭があり、そこにはバーベキュー用の炉やプールがある。さらに我々が憧憬のまなざしで注目したものは台所であり、その大きさと明るさ、巨大な冷蔵庫やオープン、ミキサー、トースターなど最新の電化製品と眩いばかりのシステムキッチンなどは、日本の当時の暗い台所と比べてそれはまるで夢の世界であった。家族はハンサムで包容力のある父親と美人でやさしい母親、オシャレでかわいい長女、明るくてスポーツ好きな長男、そして犬が一匹の豊かさと幸せを絵にかいたような風景であった。

日本でテレビが普及し始めた昭和30年代に、TVで放映されたアメリカのテレビドラマで見せられたのは正しくこのようなアメリカのサバービアであり、この情景の背後にアメリカ南部の貧困や黒人たちの公民権運動の存在も知らずに、この典型的なアメリカを一種の憧れや努力目標として見つめていた。

たしかに、1950年代中頃（朝鮮戦争後）から1970年代のベトナム戦争敗北までの20年間は、いわゆるバックスアメリカーナといわれるアメリカの良き時代で、上記の郊外生活の点描は、当時の多くの大都市郊外で見られた「普通の風景 Ordinary Landscape」であった。

その後十数年の間は、我々は「豊かで・成長・発展する郊外 (Suburbs)」vs「悪化・衰退・空洞化する中心市 (Central City)」の二項対立の形でアメリカの都市を捉えてきた。しかし、筆者は1973年以来、何度かアメリカの郊外を巡検する機会を得たが、1980年代中頃以降、郊外が上記のような画一的な性格ではなく多様化してきていることと、「豊かで、美しく、安全で、成長する郊外」という表現も過去のもので、現在では郊外自体がRace, Gender, Classの面で極めて多様な特徴をもちアメリカ社会の矛盾や問題点を内包した普通の風景（都市景観）となっている。

1章 問題の所在

「アメリカの郊外や郊外化」に関する著作や論文は、数多く出版されている。その中で代表的なものは、都市史の視点からアメリカの郊外を研究したケネス・T・ジャクソンの『クラブグラス・フロンティア—アメリカの郊外化』（1985）であろう。彼は昔から存在した「スラムとしての郊外」から「上流階級の郊外の発生」を歴史の流れの中で議論し、そして社会階層的に同質性の高い中産階級の郊外についてその性格や背景、問題点などを具体的事例の分析と共に説明している。特にモータリゼーション後の郊外化はあまりにもダイナミックな変化であり、大規模な都市機能の分散化は従来の範疇で都市を語ることをむづかしくしている。しかし、彼の分析と予測は70年代中ごろまでのデータに基づくもので、現在の郊外の変容を十分に説明できるかは疑問である。その他、サム・バス・ワーナーJr.（1962）がボストンの路面電車による郊外化をヘンリー・ピンフォード（1985）はボストンにおける郊外の発生の問題を議論している。ロバート・フィッシュマン（1987）は、英国における郊外の生成からフィラデルフィアやロサンゼルス郊外化を検証し、郊外がブルジュワのユートピアであると結論づけている。また、ドロレス・ハイデンは、ジェンダーの視点から郊外生活をアメリカン・ドリームのも再構築と位置付けその問題点も議論している。

論文では、竹田有（1994）が郊外を19世紀アメリカの中産階級の発生と再生産プロセスの中で議論し、杉浦章介（1994）は、ピーター・ロウのミドル景観の概念から戦後の郊外化を総括している。また、三浦展（1999）も、アメリカの戦後の郊外生活の住宅地としての欠点や問題点を議論し、それを見ならった日本の郊外生活の矛盾と不完全さをすどく批判している。

上記の先行研究は、それぞれにアメリカの郊外研究における基本的で重要な問題を議論し今日の郊外の分析には必要不可欠な知識と有効な視点や示唆を与えるものであるが、本論文では、今日のアメリカの郊外を取り巻く状況が、従来の限りなく発展する郊外、より内容的質的に高い住宅地域を建設し成長する郊外といった右肩上がりの状況から一種の成熟状態 (mature) に達し、さらに衰退・悪化傾向を示し始めた郊外として捉え、その問題点や背景をあきらかにしていこうとするものである。筆者は1980年代の郊外化を検討したことがあるが³⁾、従来中心市 (Central City) がここ数十年に亘って改善しようとした都市問題と同じ問題を、郊外も抱えはじめたという今日的状況がある。筆者は2000年1月と3月にフィラデルフィアの郊外に関する調査を行ったが、その際、「インナーサバーブ」ということばをアメリカの地理学者から聞いた。従来アメリカの都市問題の中心であった「都心の空洞化とインナーシテイ問題」と同種の問題が郊外でも議論されはじめた。また、従来「ホワイート・サバーブ (白人の郊外)」として同質性の高い地域社会が非白人の流入によって摩擦や変化がおこったり、価値やライフスタ

ルの多様化が進む中で、郊外自体はどのように変容したのであろうか。この変化は、アメリカ社会で最大人口を占める地域での変化であり、従来アメリカの保守主義の基盤といわれた郊外の変化であり、アメリカの政治力学や地域主義にも大きな影響を及ぼすものとして、現在のアメリカの理解と今後のアメリカを予測する上で大変重要である。本論文では、戦後の代表的な郊外といわれるレビットタウン（ニューヨーク州とペンシルベニア州）とフィラデルフィア西郊の郊外マーブルを取り上げ、前者では時系列的視点と地域内規制の問題から、後者では周辺の郊外との比較から、戦後の郊外の性格と問題点を検討して行きたい。

2章 レビットタウン（ニューヨーク州ロングアイランド）の事例

1節 レビットタウン（NY）の概略

アメリカにおける戦後の住宅に最も大きな影響を与えた家族はアブラハム・レビットとその息子たち、ウィリアムとアルフレッドであった。彼等是最終的には14万戸以上の住宅を建設し、従来の小さな住宅産業を巨大な流れ作業式製造業（プレハブ住宅）へと成長させた。彼等は、1929年にロングアイランドで小規模な産業から出発した。そして、各地で数年間政府系の住宅建設や、戦争特需を請負い戦前から全米では大手の建築会社の仲間名を連ねていた。

そして、第二次大戦後、ロングアイランドに戻って、1946年ロスリンに2250戸の住宅を建て、17,500ドル～23,500ドルの価格で販売した。しかし、この価格は戦争から帰った軍人たち

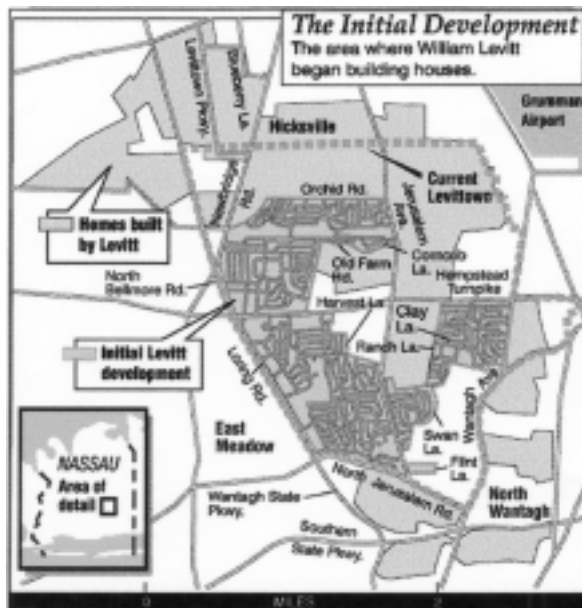


図 1

資料：Levittown at Fifty (<http://www.lihistory.co/specsec/gmap28.hem>) 1999.

の支払能力をはるかに越えていた。そこで、同年レビットはロングアイランドのヘンプステッドの町に4,000エーカーのジャガイモ畑を取得し、アメリカの歴史の中で民間としては最大の住宅団地の建設に乗り出した。建設には大幅な技術革新を取り入れ、現場での作業から工場生産方式へ、下請け業者への外注など建設工程の垂直統合により大幅な建設時間の短縮が行われた。1947年10月に最初の300戸が完成し、部屋数4室からなるケープコッドスタイルの住宅が完成し、最初は貸家でスタートしたが、1949年からは住宅ローンを使った建売住宅になった。ニューヨークのマンハッタンから東へ25マイルという近接性（図1）やGI法（1944）による復員軍人への住宅ローンが追い風になり、子育て中の若い夫婦を中心に飛ぶように住宅は売れた。彼等の家は、すべて同じような外観の家で生活も単調なものだったが、彼等にとっては一軒家を持つということが何よりの喜びであり大きな満足であった。当時の地元紙には、彼等の生活が年齢や所得、住宅に対する考え方、その家族が抱える問題などにおいて非常に似通っている事を伝えている。また、レビットタウンでは、たくさんの子供が生まれたので、「多産・繁殖の谷」とか「ウサギ飼育場」と呼ばれた。最終的には、17,400戸以上の戸建て住宅と82,000人の人口を擁するまでになった⁴。

2節 レビットタウンの特徴と変容

戦後の代表的中産階級（労働者階級）の郊外団地といわれたニューヨーク州レビットタウンの特色を、過去40年間の変化を通して検証してみよう。

（1）人口の変化とその民族・人種的構成（表1）

1960年に65,276人であった人口は70年代までは同じくらいの数値で推移し、1980年代から急に減少しさらに90年代からはより一層減少が激しくなっているのがわかる。因みに、1960年を100とする指数をとってみると70年は100.3、80年は87.4、90年は81.6、96年は67.5となり、2段階に人口が減少していることがわかる。最初の減少は60年代のベビーブーマーたちの子育てが終わり、子供たちが親の家から独立して離れ、従来の核家族主体の地域社会から夫婦二人の世帯が中心となったものと考えられる。そして90年代は、各世帯の高齢化による独居世帯の増加とそれ以外の世帯もライフスタイルの多様化から女性世帯主の世帯、子供を持たない世帯などの出現も考えられる。

では、従来白人労働者階級の郊外といわれ、極めて排他的、差別的な郊外住宅団地というネガティブな評判をとったレビットタウンの民族・人種構成はどのように変化したのであろうか（表1）。1960年は、住民の99.7%が白人であり、わずか0.3%（1960年度の人口調査では、白人・非白人の区別しかない）が非白人となっており、本団地が社会階層的には労働者階級主体という中流の中から下という集団でありながら、圧倒的に白人を主体とする人種的には排他的な構成になっていることが理解される。1970年の詳細なデータによると、非白人は0.5%で白

人専用団地の性格は殆ど変化していない。非白人の内訳は、アジア系が0.2%、ヒスパニックが0.1%、黒人は0.1%となっているが、このような構造は公民権以前のあるいはベトナム戦争敗北以前のアメリカ郊外では、ごく一般的な状況であったと考えられる。

1980年代になると若干の変化が見られ、ヒスパニックやアジア系人々の増加が顕著である。しかし、黒人（アフリカ系アメリカ人）は、依然として全住民の0.1%という低い割合で、全米全体の人口に占める黒人の割合11.8%（1980年センサス）からしても、本団地が非白人に対して極めて排他的な団地であったことを示している。その後の変化では、1990年から1996年になると、ヒスパニックやアジア系住民が急激に増加し、本団地の母都市であるニューヨーク市におけるヒスパニックの増加（1980年代以降）と同じ傾向を示している。これはカリブ諸国やアジアからの移入民が、中心市の住宅環境の悪化から、より安全で快適な住環境を求めて脱出した人々が購入可能な価格の住宅地であることを示している。しかし、黒人の割合の変化は相変わらず鈍い。全米の全人口の12%を占め、ヒスパニックの9%をしのぎ、大都市圏にかなり高い割合で密集している黒人が、わずか0.4%しか占めていないのは、本団地の排他的性格のみが原因ではなく（ヒスパニック、アジア系の増加）、黒人たちが経済的な状況から依然として中心市（ニューヨーク）のインナーシティー（スラム等の住宅不良地区）から脱出できないことを示している。また、移民に対する寛容性（表2）も周辺地域よりかなり低く、上記の分析と同様でマイノリティや移民に対する態度は殆ど変化していない。

（2）住民の属性

< 退役軍人・ベテラン（表3） >

ウィリアム・レビットが、労働者向け・中産階級向けの団地の建設を計画し、入居者を募集した時、彼はベテラン（退役軍人）には、「頭金なし」という特典をつけて販売した。1960年のデータから、全世帯の61%がベテランであり、アメリカ政府の持ち家政策とレビットが出したベテランへの優遇措置の効果が非常に強く現れていることが理解されるし、かつ、本団地が、この団地を含むナッソー地区全体よりもベテラン率が12%も高くなっているのも特色である。1970年では若干、ベテラン率は減少しているが、全世帯の過半数を占めている。しかし、1980年代になると大幅な減少を示している。これはベビーブーマーたちの子育ての終了とともに、若者（核家族）向けの郊外団地は、文化的・社会的基盤（インフラ）の整備が不十分で、アメリカで言う「Poor man's suburb（貧しい人たちの郊外）」の持つ構造的欠陥⁵⁾が高齢者にとって「住みにくさ」につながり、より便利な都会の近くやあるいはより暖かい南部・西部へ移動していったものと推測される。

< 高齢化 >

レビットタウンが地域としての社会的属性 (social mix) の点で極めて偏った構成になってい

ることは、最初から指摘された事であるが、本団地の年齢構成を中位年齢（表4）と65歳以上の高齢者率（表5）から見てみよう。

中位年齢を見ると1960年では22.0歳で周辺のナッソー地区の30.6歳に比較しても際立った特徴を示し、まさしく子育て中のベビーブーマーたちが多数を占めていることがわかる。このことから、本団地が若い世代が多少交通に不便であっても子育てに良い自然の豊かな環境を選択したものと考えられる。そしてこの傾向は、60年から70年、80年、90年と時代の変化の中で、約10歳くらいの上昇は見られたが、依然として本団地は周辺よりは3歳から4歳若くなっている。この指標の対極ともいべき高齢者率（表5）を見ると、1960年では65歳以上の割合が、3%と周辺地域平均の半分以下の割合で、本団地が若年労働者階級をターゲットにした団地であることを物語っている。この傾向はペンシルベニアのレビットタウンの場合も同様で、フィラデルフィアの労働者やトレントン南部のUSスチール（当時）の工場労働者を顧客層と考えると計画された。

しかし、70年代までは低かった高齢者率も、80年から90年と時代経るに従って、急激に上昇して96年では10.8%までなったが、それでも周辺地域や全米平均よりかなり低い割合を示している。

（3）家族、世帯の性格とその変容

<世帯あたりの子供の数（表6）>

レビットタウンが、中産階級、労働者階級のための郊外という宣伝文句で開発・販売されてきたが、その家族の特徴とその変化を一番明確にあらわしているのが、子供の数の変化である。戦後のベビーブーマーといわれる世代（日本での団塊の世代）は、両大戦の間や戦時中、幸せな家庭生活を送ることが出来なかった反動やあるいは彼等の夢の実現のため、戦後は結婚し、郊外の自然が豊かで、空間に余裕のあるところに一戸建住宅を持つ事が夢であった。そしてそれが実現すると、幸せな家庭に必要な子供たちをつくり、幸せな家庭を築くというさらなる夢を追求していった。1960年の世帯あたりの子供の数が4.20人で周辺地域より0.5人多くなっているのは、本団地の性格を良くあらわしているが、1970年の4.89人と大幅に増加している事は、レビットタウンの特徴が従来からの中産階級の郊外とは異なった特徴を持っていることを示していて、非常に興味深い。戦後アメリカが世界最大の経済力を背景にパックスアメリカーナを謳歌する中で、特に「郊外生活」というアメリカの豊かさのシンボルを手にしたベビーブーマーたちは、アメリカ社会の矛盾や問題よりも、眼前の幸せを十分満喫し、世界一の裕福な国アメリカの将来の可能性を信じて、5人という先進工業国では例を見ないたくさんの子供をもったものと思われる。ただ、彼等がいわゆるホワイトカラーのStraight Middle階層（中産階級）ならば、将来の教育等の子供の養育に係る費用の面から、子供は若干低いものになったと

考えられるが、労働者階級の家庭の場合、移民以来の伝統で、子供は労働力として位置付けられ多産が一般的な傾向であったと思われる。

しかし1980年になると従来のアメリカ神話の崩壊や経済不況によって、アメリカ社会は地域や家族中心から個人志向へとその関心をシフトさせ子供の数も急激に低下した。そして、現在（1996年）でも若干ではあるが、レビットタウンが周辺地域より子供の数が勝っている。

<家族のあり方>

次に、夫婦共働きの割合（表7）は、1960年は22%で周辺よりも若干低くなっている。これはいわゆる労働者階級の場合、妻が子育てにかかわっていることの他に、ヨーロッパからの家族慣行を保持し、男は仕事女は家庭というビクトリア的家庭観の影響があったものと思われる。あるいは上層中産階級 Upper Middle の家庭で一般的であった婦人は家庭にあって子供の教育、道徳、宗教などを担当するという習慣を模倣した場合も考えられるが、むしろ上記の女性を外で働かせない（南部イタリアあるいは東ヨーロッパの農村出身）という伝統的家庭観に基づいているものと思われる。

しかし、1970年には全世帯の37%で共働きが一般化し、80年50%、90年68%と女性が外で働くことが当たり前ようになっていく。そして、その割合も、周辺地域より若干高くなっておりその格差は拡大しつつある。共働きに関しては、60年～70年代にかけて公民権運動と同じく展開された女性解放運動の成果と見る事が出来るし、アメリカ社会の物質至上主義の文化の中で、豊かな生活を求めたり、同質的な生活の隣人や住民の中で他人との差別化を図りたいと願ったり、また一般的に郊外生活は中心市での生活よりも光熱費やガソリン代などに経費がかかるので、中産階級の中層・下層の住民にとっては一名の所得では不十分であり、二名の収入を得る事によってようやくその快適な生活を維持することができる。

ところが、このことが逆に労働者用郊外住宅団地の大きな問題になっているといわれている。つまり後の章で検討するが、近年の郊外地域での犯罪の増加は、昼間における郊外団地の留守化、共働きによる家族関係の希薄化が、犯罪の温床になり、窃盗、強姦、器物破損、落書き、ドラッグ、殺人など中心市のインナーシティーと同じような犯罪が頻発するようになった。

共働きの増加とともに、女性を世帯主とする家庭が90年代になって急増している（表8）。1970年、80年は全世帯の10%が女性世帯主の家庭であったが、1990年では約3倍にまで増加しているのは、女性の経済的独立の面からは望ましい事かもしれないが、現実の家族の収入を考えた場合、貧困問題につながり、地域の悪化にも影響を及ぼしかねない。

（4）経済的指標について

次に世帯別平均所得（表9）を見ると、本団地が周辺地域より若干世帯あたりの所得が低い点が注目される。これは本団地の建設の当初からいわゆる中産階級の中でも若干低所得者層、あ

るいは労働者層を対象に売り出された郊外団地であるので、40年余り経た現在も同じ特徴を継続している。第二のポイントとして、60年～80年の間に大幅な所得の上昇が見られるが、これはパックスアメリカナの中での経済成長に伴う労働者やブルーカラー層の所得の上昇によるものと思われる。80年～90年にも急激な所得の上昇が見られるが、本団地の家族の伸び率が低くなっている。これはバブル経済による急激な上昇が主に高学歴、ハイテク関連、ホワイトカラー層に見られたもので、本団地のようなブルーカラー層は、逆に合理化やリストラの対象となるというアメリカ経済の構造的な問題とも関連していると思われる。90年～96年は、ホワイトカラーも合理化の対象になり、中産階級の減少と二極分化が見られた時期で、所得の上昇は低く押さえられていることと、職種による格差が縮小している。

住宅価格（表10）の変化は、各世帯にとっては大変重要な問題である。この表から60年～80年は所得の伸びともリンクした中庸の上昇であり、住宅価格は、世帯所得のほぼ2倍の線で推移していた。しかし、80年～90年の急激なインフレ（バブル経済）は、住宅価格を10年間に3.5倍から4倍弱へと上昇させ、世帯所得との倍率も3倍に跳ね上がった。資産価値の上昇よりも所得が伸び悩む中での不動産の上昇は、日常物価を押し上げることになり、生活自体は却って苦しくなるものと思われる。

最後に、過去5年間同じ家に継続して住んだ世帯の割合（表11）を見ると、70年以降70%、72%、77%とその割合を高めており、このことは本地域の住宅市場の流動性が余り高くないことと、その結果60年代に入居した若かった家族・世帯が子育てを終わり子供が家を離れても、さらに世帯主が退職した後もそのまま同じ家に住みつけ、団地としてはかなりの高齢社会に突入している事が推測される。この問題に関しては、フィラデルフィアの西の郊外、マーブルの章で再度検討したい。

3章 レビットタウン（ペンシルベニア州バックス郡）の事例

1節 レビットタウン（PA）の概略

ウィリアムとアルフレッドのレビット兄弟は、ロングアイランドでの住宅建設の後、ペンシルベニア州バックス郡に、5,560エーカーの土地を取得し17,000戸の住宅を建設した。この場所はペンシルベニア州南東部でフィラデルフィア市（PA）とトレントン市（NJ）の間に位置し、東部の重要な高速道路 - 95とそのバイパス - 295に挟まれた土地で、もとは農地、森林、沼沢地であった。

行政的には、プリストル、フォールズ、ミッドルトンの3つのタウンシップとタリータウン・ボローの4地区にまたがっている。建設の目的は、フィラデルフィアとトレントンの労働者に一戸建ての住宅を供給することであった。両都市は全米でも有数の工業都市であり、その

膨大な数の工場労働者は重要な市場を提供したが、特にトレントン南部のUSスチール・フェアレス工場は多くの労働者がインディアナ州のゲーリ工場やペンシルベニア州の農村地域や炭田地帯から来ていたので多くの需要が見込まれた。

住宅は短時間で作って安く売るのがモットーとし、建築には最新工法を取り入れてプレハブ方式で出来る限り工場生産し、現場では1日で完成させ一週間に200戸の割合で建設した。1951年にはショールームを開設し、レビットタウンスタイルの住宅は70×100フィートの大きさを価格は9,990ドルで売り出された。これ以外にジュリエー、ランチャー、コロニアル、ペンシルバニアン、カントリー・クラブなどの住宅バリエーションもできて、最高のカントリー・クラブは16,900ドルもした。この住宅団地の特徴は、ニューヨークのレビットタウンと違って自己充足型の住宅団地であり、学校、教会、リクレーション施設、ショッピングセンターを団地内にもっていた。また、各戸に食洗器、冷蔵庫、電気レンジが装備されていただけでなく、表庭の植栽も付設されていた。レビットタウンは、住宅価格を買いやすい値段にしたので若い人が最初に購入した。購入者の出身は、上述の製鉄工場や他の工場団地の他に40%がフィラデルフィア市から、他はフィラデルフィアの郊外のバックス郡、モントゴメリー郡、そしてペンシルベニア州やニュージャージー州の北部の人たちであった⁶⁾。

2節 住宅団地における規制と景観

郊外住宅地の特色の一つに、統一された景観や外観があげられるが、ペンシルベニアのレビットタウンの場合も、住宅購入の際に今日の「住宅所有者協会規則」の先駆けのようなものにサインが必要であった。今日、アメリカでも郊外住宅地の悪化が問題になっているが、最初の規則を検討してみることによって、現在の問題の原点を探ってみる⁷⁾。

本住宅団地の場合、規則は、10項目からなっている。

- (1) ガレージ、カーポート、部屋の建て増しの際には、建築様式、色彩、材質を合わせることと、母屋の正面の建て増しは不可で、家の横や裏の建増し場合も一定の距離のセットバックを行って、全体のバランス壊さないようにする。
- (2) 家の標識を出す場合、その大きさが1平方フィート以上は不可。
- (3) 犬猫は2匹まで飼えるが、繁殖や手入れを商売にすることは許されない。
- (4) 医者や歯医者などの専門職は居住は良いが、住宅地での開業や商売は不可。
- (5) ごみ出しは、金属製の容器に入れてフタをする。
- (6) 生垣は3フィートの高さを越えてはならない。木や金属などの人工的なフェンスは絶対に不可。レビットタウンの都市計画では、最大限の開放感と公園の道のような景観(住宅地公園)を重視した。フェンスは材質のいかんにかかわらず酷く、空間を細分化するので不可。

- (7) 洗濯物は家の裏に干し、回転式移動物干しを使用。旧式な物干しのロープは不可。
日曜日や休日は余暇をゆったりと楽しむために洗濯物を芝生に干すことは不可。
- (8) 敷地の後ろに道路が通っている場合、敷地は普通より20フィート奥行きが深くなっている。その結果住民のプライバシーが通行車両や歩行者から守られる。
- (9) 4月15日から11月15日は少なくとも週一回芝生を刈り、雑草を抜かなければならない。
- (10) もし、貴方が角地に住んでいたら、角に植えてある植物を抜いてもいけないし新たに植えてもいけない。

これらの規則・規制がどの程度遵守されたかは不明であるが、1996年調査した際、殆どの地区でかなり守られていた。しかし、地区によって若干ばらつきがあり植栽が消滅している家、フェンスは禁止されているにも関わらず、木製のピケットフェンスを立てている家が散見した。住宅地全体に街路樹が50年の年月のなかで、非常に大きく育っていて、むしろ落ち葉や枝の剪定など別の新たな規制があるのではないかと思われた。各戸に関しては表庭はかなり手入れ行き届いていたが、住宅傷みがかなり目立っていたのは、当初からコストを落とした建築であった事の結果と思われた。

4章 フィラデルフィア市郊外マーブルの事例

伝統的郊外のかかえる問題とその対応

1節 マーブルの概要

フィラデルフィア市の市境界線より西6マイルに位置するデラウェア郡のタウンシップである。人口23,123人〔1996年〕が10.5平方マイルの土地にスプロール状（虫食い状態の都市化）に分散居住している。1960年の統計では人口3401人であったが、第二次世界大戦後の第一次郊外開発ブームの時、起伏のあるなだらかな丘陵地帯の樹木やブッシュを切り開いて、郊外住宅地が建設された。マーブルの長所として、フィラデルフィア市西郊の戦前型高級郊外住宅地「メインライン」（アメリカの代表的上中流階級の郊外）に近接していることもあげられる。この町からフィラデルフィアのダウンタウンの高層ビル群が見えるという近接性と四分の一エーカー（1012平米、約300坪）の敷地の一戸建て住宅が、若い夫婦にも購入可能な価格で売り出されたことが、この町を農村地域から典型的なアメリカの郊外へと発展させた。マーブルは多くのアメリカ人にとって、アメリカンドリームの実現を象徴するような場所の特徴を持っている⁸⁾。

戦後、アメリカの多くの大都市の縁辺部には、戦後の実験的郊外都市がよく見られる。フィ

ラデルフィア大都市圏を例にとると、西にマーブル、北にはアピントンやローアモーアランド、ホワイトマーシュ、東のニュージャージーには戦後の代表的郊外のチエリーヒルやメイプルシエイドがある。さらに、戦後型郊外の手本とも言うべきレビットタウン（PA）が北東に開発された。

2節 マーブルの性格と問題点

前節で、マーブルがフィラデルフィア大都市圏の、アメリカの典型的戦後型郊外住宅地であると述べたが、その性格（特徴）を同じフィラデルフィア大都市圏にある5つの郊外と比較しながら検討してみたい。それによって従来、アメリカ人の夢、中産階級の天国とまで言われた郊外が、現在どのような問題を直面しているのか明らかにする事が出来る⁹⁾。

今回、フィラデルフィア市の西、北、東の方角で、いずれも都心から30分程度の距離の郊外（サバープ）を取り上げた（表12）。アピントンは南側でフィラデルフィア市の高級住宅地チエスナットヒルと接する戦後に開けた中産階級住宅地である。チエリーヒルはフィラデルフィアの東側でニュージャージー州にあり、巨大な郊外型ショッピングセンターやオフィスパークなどの多くの機能が立地するアメリカの代表的な郊外であるが、通勤電車やシャトルバスなどによるフィラデルフィアの都心との関係は密接である。ローメリオンは、いわゆる上流階級の郊外として有名な「メインラン」の中心部に位置し、戦前からの鉄道による郊外開発の姿をいまでも保持している。スプリングフィールドは、メインラインの南側の地区で、有名な大学Swarthmore Collegeや地元用の商業施設をもった静かな住宅地の郊外である。アッパーダービーはいわゆる戦前型の郊外であるが、フィラデルフィア市西部の黒人住宅地区と市境界線で隣接するいわゆる路面電車による郊外化の町で、労働者向けの長屋住宅（Row House、二連棟、三連棟）に白人労働者階級の住む町である。

<マーブルの性格>

90年のマーブルの住民の白人率（表12）を見ると、95%で他の郊外の数値の真中あたりである。かつては、白人一色といわれていたので少しは非白人も混じってきたが、依然として白人の街（ホワイトサバープ）である。近年はアジア系、特に韓国人の著しい増加が見られる。

先祖の人種構成（表13）から、各郊外の特徴を見てみよう。まず、マーブルとスプリング・フィールド、アッパーダービーの3地区は地理的にはかなり近い郊外である。この3地区は1位から4位までが同じ構成になっている。旧移民のアイランド人が1位を占め、2位に新移民のイタリア人が入っている。アピントンが1位にドイツ人占めているのは、従来からフィラデルフィアの北部にジャーマンタウン（初期の路面電車型郊外）があり、ドイツ系住民が多い方角であることが遠因として考えられる。

チエリーヒルのイタリア人も、南フィラデルフィアのイタリア人の多くの集積イタリア人街があるので、川を越したところに新しい居住地を見つけたものと思われる。

最後にローメリオンのロシア人であるが、これはかなりの数がロシア系ユダヤ人と思われる。従来は、メインラインではアイリッシュやユダヤ系は差別の対象となり、住宅取得が難しかったがバックスアメリカーナ以降、あるいは80年くらいからのバブル期において、医者や弁護士などユダヤ系アメリカ人の専門職・上流階級の人たちが、競ってメインラインに住居（豪邸）を求めうようになった。この地区の大学卒率が極めて高いのもこのことと関係あるものと思われる。

郊外の高齢化（表14）が問題になっているが、西郊の3つの郊外と北のアピントンは約30%以上と同じような割合であるが、職住一体型のチエリーヒルと労働者の郊外アッパーダービーは、若干低くなっている。

マーブルも高齢化がかなり進んでいるのが判るが、逆に18歳以下の子供が占める割合は、1970年代では35%以上であったが、1996年では20%以下になっている。ただ、高齢化の問題は、単純に55歳以上が3分の一以上を占めているという問題にとどまらず、その人たちが強力な政治力を維持しつづけるという別の問題が起こっている。

しかし同じ白人の郊外もかなり多様化しているのが、世帯別所得（表15）からわかる。マーブルの世帯別所得は、47,917ドルで、郊外のなかでは中間である。上流階級の豪邸の点在するローメリオンが一番高く、次いで職住混在型のチエリーヒルが、その下である。白人の労働者がいるアッパーダービーは、郊外であっても非常に低い。同じような傾向を見せるのが、住宅価格（表16）で、高級住宅地をもつローメリオンがスパ抜けて高く、2位のマーブルも資産価値の高い地域になっている。北部は若干価格が安く、市内の黒人集中地区に隣接し、白人労働者が住むアッパーダービーは、最良郊外住宅地の1/3、一般的な郊外住宅地の1/2である。

また、住宅の住みやすさや、居住の長期化に影響を及ぼすものとしては税金の安さがあるが、固定資産税（表17）を見ると、必ずしも上述の住宅価格と密接にはリンクしていない。マーブルは、住宅価格がかなり高かったにもかかわらず、税金が一番安い点が特徴である。

つぎに母親の就労率（表17）をみると、郊外のどの地区も60%を越えており、郊外の女性の自立という側面とリビングコストの高い郊外の生活を維持していくためには、ふたりで働くことが一般化しているものと思われる。

郊外生活がコスト高になる例として教育があり、私立学校へ通学率（表18）が非常に高い。しかし、この数字は若干吟味を要する。チエリーヒルが、極めて高い割合を示しているのは、工場や企業の撤退による地域の衰退と黒人や貧困層が集中するカムデン地区に隣接しているため、学校での児童の安全と教育の質を求めて、私立学校へ行かせているものと思われる。それに比べて、マーブルやローメリオンでは、聞き取りによるとそれぞれの地域の社会や教育現

場が比較的良い状態を保っているので公立学校への通学率も若干高くなっている。

最後に大学卒業率（表19）から、郊外がいつかのタイプに分類される。図抜けて高いローア-メリオンは、19世紀からの鉄道による郊外で、何世代に亘って社会の上流・上中流階層に属している。マーブルなど30%代の郊外は、戦後に開けた郊外で、典型的中流階層の人々が主としてホワイトカラーの仕事に従事している郊外である。アッパーダービーは、白人労働者階級の郊外なので、社会での上昇志向が余り強くなく、いまの生活や近所との親しい付き合いに関心ある現状維持型の郊外である。

3節 マーブルの問題点

前節で、フィラデルフィアの他の郊外と比較する事でマーブルの特徴と性格を明らかにしたが、いくつかの問題点を検討してみたい。建設から約50年経ち、レビットタウンと同様、かつての子育てを主体とした中流の中産階級の郊外にも変化が見られる。一般に郊外は、自らのライフスタイル、ライフステージに応じて、居住場所を移動すると言われてきたが、マーブルでは、住宅所有者の70%が12年以上の居住歴、50%以上は18年以上同じ家に住んでいる。

彼等が小さなカリフォルニア・バンガロースタイルの平家に住み始めたのは、1948年で当時の\$13,000の住宅は、現在\$150,000以上になり、今ではコロニアル・スタイルで出窓とポーチがついた2階建てが一般的である。

最近の変化を列挙すると次の様になる。先ず第一に、住民の高齢化（55歳以上が3分の一以上）と子供数の減少（18歳以下、1970年35%、1996年20%以下）、白人専有郊外への非白人（韓国人）の増加、失業者の出現、公立学校就学率の低下と若者の道德心の衰退、バブル経済による住宅価格の高騰は低価格住宅の増加を招き、デベロッパーも利益を求めて小さな住宅団地のパッチワークの開発を促進。このような変化の中で、内部の社会も教会も地域への政治力を持ちえず、地域の要ともなるタウンセンターはない。多くの住民は依然自動車への完全依存から抜けられず（労働者の80%が毎日平均往復50分の通勤時間）、マーブルでは、中々社会的団結がそだたない。

かつては父母の時代はセンターシティが通勤先であったが、いまでは20%以下（2,280人/1,1570人中、1990年）の人が通っているにすぎない。郊外化の初期の段階では、職場が中心市に残っていたが、次の段階では、文化娯楽のみを都心に残し、いまでは全ての機能を郊外で済ませるようになった。そうになると、郊外は、かつては一種の新しい場所（新開地）というみかたがあったが、今では郊外も従来の伝統的・古典的都市の特徴を持つようになった。1950年代から60年代、中心市の既成市街地（社会）は、町の老化、低所得者層やマイノリティの増加、公立学校の衰退といった問題が深刻化しつつあったが、今日では郊外の住宅地も居住開始から50年を経過して、同じ問題を抱え始めている。さらに、本論文の動機のひとつである犯罪の問

題もマーブルでは暴力犯罪や殺人はめったにないが、窃盗や自動車泥棒、自動車の破壊などが起きようになった。レビットタウン（PA）のあるバックス郡でも、郊外の鉄道駅での落書きや器物破損の増加、窃盗や麻薬などの問題も頻発している（聴き取り）。しかし、それでも中心市の状況ほどは深刻化していないので、中心市から子供の養育のために郊外への転入希望は多い。

ところで、子供の教育に関して、公立学校の質的变化がマーブルでも問題になっている。財政難による教育への予算削減が教師の質的低下をもたらし、さらに少子化と私立学校や宗教系学校の積極策もあいまって、25年間に学校入学者の半減と公立学校進学率を60%（1977）から20%（1996）に急落させた。

かつての戦後型郊外の目的は、環境の相対的静かさと良質の学校教育による家族の保護・養育であったが、今日主婦の自己目的の充足（キャリア）の場へと変化し、家庭と仕事のバランスに努力する。すると、従来専業主婦の参加で維持されていた郊外の地域社会は大きく変化せざるを得ない。

第二に、子育てのためにサバービアが、家庭の少子化と居住者の高齢化の中で多くの問題を提起している。郊外の住宅地は、このような状況を想定して建設されていないので、こどもが離れていった後、地域社会維持のための活動や高齢者の世話や介護は誰がするのであろうか？（これが住民による学校への予算削減要求になっている）自動車への全面的依存が公共交通の未整備につながり、高齢者の問題となっている。また、子育て時代には憧れたモダンで合理的な郊外の風景や文化が、高齢化の中で浅薄性を露呈し、大都市や中心市に残してきた厚重的文化への郷愁を起させている¹⁰。

おわりに

最後に戦後の郊外の性格を検討しながら、今後の変化のシナリオを述べてむすびとしたい。

1945年から1973年の郊外を総括して、郊外史研究の第一人者のジャクソンは、5つの特徴（性格）をあげている¹¹。

- （1）大都市の縁辺部（Peripheral Location）の立地：6大都市圏の1946-47の住宅建設の62%が郊外で、1950年までの郊外の成長率は中心市のその10倍以上である。そして1944年から1954年の郊外への人口移動は900万人という膨大な数である。その立地は、基本的には市境界線の外側であり農業地域に建設された。
- （2）相対的に低人口密度：その理由として、その殆どの住宅が核家族用のゆったりとした敷地を持つ一戸建て住宅であったためである。レビットタウン（NY）の人口密度は、戦後の平均で10,500人/平方マイルであったが、これは20世紀初頭の路面

電車の郊外のその約半分である。

- (3) 建築スタイルの類似性：コスト削減のための工場生産（プレハブ）である。住宅に関しては、かつてはそれぞれの土地固有のスタイルがあった（例、ニューイングランドのコロニアル、大西洋沿岸のローハウスなど）が、戦後は全国一様に、ケープ・コッド様式やランチスタイル（レビットタウン）であった。
- (4) 住宅取得可能性の達成：大量生産技術、政府の財政的援助、高賃金、低利の住宅ローンにより住宅取得の可能性や市場が拡大した。
- (5) 経済的、人種的同質性：従来、フィラデルフィアのメインラインやニューヨークの排他的郊外では、収入や人種によって家族が分類されていたが、戦後の郊外も経済力や年齢による同質性が重要視されたり、いくつかの郊外では、人種を明確に区別する差別が行われた。レビットタウンは、社会階級による階層化をおこなう地域社会（団地）として有名であった。

しかし、前節で検討したように、これらのことがそれぞれ住民の高齢化の中で変容を迫られている。

それでは、これらの郊外の将来はどのように変化して行くのであろうか、2つのシナリオを述べてみよう。

シナリオ1は、町は老朽化と住民の高齢化が進むなかで、高齢者の死去や移動による住宅市場の供給過剰がおこり、住宅価格（資産価値）が下落する。

シナリオ2は、大規模が道路建設、インターチェンジの開設による郊外の再開発を行い大都市圏でのアクセシビリティを増し、新たな住宅や物流基地（商業施設）を誘致導入して地域の活性化を図る。

マーブルがシナリオ1を選択した場合、住宅価格の下落と低所得者の流入がおきて富裕層の脱出がおこり、その後にも更なる低所得者の増加が予測される¹²⁾。

シナリオ2の場合は、通勤への利便性と新たなビジネスチャンスを求めて、より多くの人々が住宅を購入するが、それに伴って、かつてのマーブルのメリットであるオープンスペース、静かな環境、豊かな自然環境の保持は難しくなる事が予想される。

注

- 1) Jackson, T. Kenneth: America's Rush to Suburbia (New York Times, June 9, 1996)
- 2) 三浦展：「家族」と「幸福」の戦後史 郊外の夢と現実（講談社現代新書1999）p17-18
- 3) 中野雅博：アメリカの郊外化とその課題（地理28-9、1983）P35-46
- 4) Levittown at Fifty: <http://www.libhistory.com/specsec/levint.htm>
- 5) 例えば 自動車利用が不可欠。効率的、合理的は住宅配置。商業・サービス施設への近接性の欠如、歴史・伝統の欠如。など。

- 6) Levittown, Pa 50th anniversary: <http://members.dencity.com/levittown/townhistory.htm>
- 7) The Regulation: <http://levittowners.com/history/rules/levittownregulation.htm>
- 8) Mark Bowden: Classic Suburb adjustment to new set of growing pains (Philadelphia Inquire, Feb.9 1997)
- 9) Suburbia at 50: a Case Study; an over view of Marple and other suburbsの統計資料による [Philadelphia Inquire, Feb.9, 1997]
- 10) Suburbia at 50, ibid.
- 11) Jackson, T, Kenneth: Crabgrass Frontier—The Suburbanization of the United States (Oxford University Press, 1985) p238-242
- 12) Suburbia at 50, ibid.

<参考文献>

- Binford, Henry C (1985): The First Suburbs—Residential Communities on the Boston Periphery, 1815-1860 (University of Chicago Press)
- Fishman, Robert (1987): Bourgeois Utopias—The Rise and Fall of Suburbia (Basic Books)
- Jackson, T. Kenneth (1986): Crabgrass Frontier—The Suburbanization of the United States (Oxford University Press),
- Warner, Jr. Sam Bass (1962): Streetcar Suburbs—The Process of Growth in Boston (1870-1900) (Harvard University Press)
- ハイデン, ドロレス, 野口美智子他訳 (1991) : アメリカン・ドリームの再構築 住宅, 仕事, 家庭生活の未来 (頸草書房)
- 杉浦章介 (1994) : 郊外ミドル景観の創始と変容 戦後の郊外化 (アメリカ研究28)
- 竹田 有 (1994) : 郊外化とアメリカ中産階級 (アメリカ研究28)
- 井崎義治 (1991) : 『快適都市の創造』(ぎょうせい) p 3 - 6
- 塩崎賢明 (1993) : リストラクチャリングと都市の郊外化 ロサンゼルスを中心に (重森暁, 遠州 尋美編 『都市再生の政治経済学』東洋経済)

表1 Levittownの人口変動と民族・人種構成(1960年 - 1996年)

	人口	指数	White	Black	Hispanic	Asian	Other
1960	65,276	100	99.70%				0.30%
1970	65,440	100.2	99.50%	0.10%	0.10%	0.20%	0.20%
1980	57,045	87.4	97.80%	0.10%	1.50%	0.70%	1.50%
1990	53,286	81.6	97.30%	0.20%	4.20%	1.90%	0.60%
1996	44,046	67.5	96.90%	0.40%	4.90%	2.60%	0.10%

表2 外国生まれの住民率

	Levittown	Nassau
年度		
1960	6%	9%
1970	5%	8%
1980	6%	10%
1990	7%	13%

表3 退役軍人の割合

	Levittown	Nassau
年度		
1960	61%	49%
1970	55%	51%
1980	27%	19%
1990	27%	29%

表4 住民の中位年齢

	Levittown	Nassau
年度		
1960	22	30.8
1970	24.9	30.9
1980	30.3	34.1
1990	33.7	36.5

表5 高齢者率(65歳以上)

	Levittown	Nassau
年度		
1960	3.00%	6.20%
1970	3.60%	8.00%
1980	6.00%	10.60%
1990	10.80%	14.20%

表6 世帯あたりの子供数(人)

	Levittown	Nassau
年度		
1960	4.2	3.7
1970	4.89	3.52
1980	3.46	3.41
1990	3.17	2.94

表7 共働き世帯率

	Levittown	Nassau
年度		
1960	22%	25%
1970	37%	35%
1980	50%	47%
1990	60%	55%

表 8 女性世帯主の世帯率

	Levittown	Nassau
年度		
1960		
1970	10%	8%
1980	10%	11%
1990	27%	15%

表 9 平均世帯所得

	Levittown	Nassau
年度		
1960	\$7,467	\$8,515
1970	\$13,129	\$14,632
1980	\$25,493	\$26,090
1990	\$52,866	\$60,619
1996	\$58,648	\$60,887

表 10 住宅平均価格

	Levittown	Nassau
年度		
1960	\$14,000	\$18,500
1970	\$23,900	\$30,200
1980	\$42,700	\$56,500
1990	\$162,600	\$177,500

表 11 過去 5 年間同住宅居住率

	Levittown	Nassau
年度		
1960	16%	16%
1970	69%	66%
1980	72%	72%
1990	77%	67%

資料：表 1 - 表 11 は U.S. Census Bureau (Mu Multiple Listing Service of Long Island Inc.)
<http://www.lihistory.com/specsec/year28.htm> 1999 より筆者作成

表 12 民族・人種構成

1990年のフィラデルフィア大都市圏郊外の民族・人種構成
 %は1990年の全住民に対する白人住民比率

Marple 95%	Abington 90%	Cherry Hill 90%
Lower Merion 93%	Springfield 98%	Upper Darby 92%

表 13 先祖の人種構成

1990年センサスに報告された先祖の上位 5 人種（1990年）

Marple	1.Irish	2.Italian	3.German	4.English	5. Russian
Abington	1. German	2. Irish	3.Italian	4. Hispanic	5. English
Cherry Hill	1. Italian	2. German	3. Irish	4. Russian	5. English
Lower Merion	1. Russina	2. Irish	3. German	4. English	5. Italian
Springfield	1. Irish	2. Italian	3. German	4. English	5. Polish.
Upper Darby	1. Irish	2. Italian	3. German	4. English	5. Hispanic

表 14 高齢者人口率

全体の人口に占める 55 歳以上の人口率 (1990 年)

Marple 33%	Abington 31%	Cherry Hill 26%
Lower Merion 30%	Springfield 32%	Upper Darby 25%

表 15 世帯別所得

1989 年のフィラデルフィア大都市圏郊外の中位世帯所得

Marple \$47,917	Abington \$44,090	Cherry Hill \$54,432
Lower Merion \$63,197	Springfield \$49,541	Upper Darby \$32,356

表 16 不動産価格

1996 年に地方自治体届出の不動産売買から電算された平均住宅価格

Marple \$162,000	Abington \$127,000	Cherry Hill \$140,000
Lower Merion \$235,000	Springfield \$146,000	Upper Darby \$86,000

表 17 母親の就業率

17 才以下の子供を持つ母親の就業率 (1990 年)

Marple 61%	Abington 68%	Cherry Hill 63%
Lower Merion 66%	Springfield 61%	Upper Darby 63%

表 17 固定資産税

1996 年度の地方自治体リスト掲載の平均価格住宅に対する土地建物への税金

Marple \$1,981	Abington \$2,327	Cherry Hill \$4,117
Lower Merion \$2,840	Springfield \$2,816	Upper Darby \$2,264

表 18 私立学校への通学率

幼稚園から高校までの児童・生徒の私立学校への通学率 (1990 年)

Marple 59%	Abington 67%	Cherry Hill 86%
Lower Merion 59%	Springfield 70%	Upper Darby 61%

表 19 高等教育

25 歳以上の住民の大学卒業率 (1990 年)

Marple 30%	Abington 33%	Cherry Hill 41%
Lower Merion 58%	Springfield 30%	Upper Darby 22%

資料：表 12 - 表 19 は, Suburbia at 50 (philadelphia Inquire, Feb.9, 1997) の統計より筆者作成

Rethinking of suburbia in the United States ; the case of suburbs of New York and Philadelphia

Living in Suburbs at a big and cozy single house has been a kind of American Dream for all American people. In particular, since the end of the World War II, many people have moved out from central city into suburbs on the purpose of seeking for more comfortable environment to raise children and escaping from deteriorated neighborhood. However, suburbia (suburban life) has been involving several contradictions in terms of class, race and gender. At one time, it was said that suburbia is a sort of mechanism of reproduction of straight middle class in American society. As white people have dominantly occupied most of suburbs, we called it white suburbs. Woman as housewife had responsibility with education of children and morality for Victorian womanhood. It was an ideal image of typical successful home. However, these a couple of decades, there have been various kinds of problems with suburbia. For example, increase of crime, broken family, unemployment and aging of community. So this paper is discussing about the transformation of the suburbs in the United State and its reason and background in terms of Levittown in New York and Pennsylvania as a working class suburb and Marple in Philadelphia Metropolitan Area as a middle class suburbs.

（Masahiro Nakano ,本学部教授）

